小説

森山啓文学賞

一対のかんじき

西軽海町　山　勝　三

プロローグ

これから述べるのは、あれから半世紀たった今も、真木幹夫にとって忘れ去ることの出来ない白山山系大日山遭難事件と、それにまつわる彼の数奇な出会いの物語である。当時この遭難事件は、連日、新聞やテレビで大々的に全国報道され、世間の耳目を集めた。

(一)

今年、喜寿を迎えた真木幹夫の車庫の壁に、色褪せくすんだ一対のかんじきが所在なげにぶら下がっている。これは今から半世紀近く前の正月、白山山系の大日山で下山の途上、風雪に巻かれて遭難死した岳友、板倉宏の遺体が、両足にしっかりとくくり付けていたものだ。春先、雪解けの進む大日山の奥深い沢の中から発見したのは捜索中の真木自身だった。

遠い日、真木と板倉は山登りを通じて実の兄弟以上の仲だった。二十代後半で元気盛りの真木は、同じ金沢近辺に在住する板倉たちと登山グループを作り、四季を問わず休暇はすべて山につぎ込んでいた。特に貴重な休暇が連続して続く暮れ正月は、雪山に浸り下界で迎える事は稀だった。毎年、仲間と雪の中でテントを張り、日中は周辺のピークに攀じ登って快哉を叫び、夜はすき焼きをつつきながら酒を酌み交わし、山も割れよと大声で雪山讃歌や青春讃歌を歌うのが、定番だった。

真木たちの登山グループ「かもしか山岳会」は、一年を締めくくる納山会を十二月中旬、白山系の前峰、奥獅子吼高原で行った。雪の来るのが全国的に遅い年で、北陸の標高千㍍近い山頂でも、まだ雪は三十㌢程度だった。山頂直下にある掘っ立て小屋同然の傾いた山小屋の中で車座になり、すき焼き鍋をつつき、酒とビールで乾杯を繰り返しながら、行く年、一年の山行の無事を感謝し、来る年、一年の山行プランを練った。そして年度の初っ端を飾る恒例の正月山行は、白山山系の大日山と決めた。白山の頂上から流れ出る手取川の最大の支流である大日川の、源流に位置する大日山は、高さこそ二千㍍に達しない山だが、国内有数の豪雪地帯の真っただ中にあって、冬は全山、数㍍の雪に覆われる困難な山の一つだった。

納山会の終了時、真木は一つの提案をした。それは明年迎える「かもしか山岳会」発足十周年記念行事として、石川県内でこれまでに発生した主な山岳遭難をまとめ、遭難史として発行しようというものだった。彼の提案は居合わせた全員が賛成し、編集は言い出しっぺの真木が担当することに決まった。

正月山行が迫り会の食糧調達を担当することになった真木は、メニューを作るなど準備を進めていた。そんなある日、事情を知らない別の旅行グループの仲間から、信州戸隠へスキーに行かないかと声が掛かった。もちろん、事情を話して即座に断った。ところが、よく聞くとそのメンバーの中に何と、かねてから密かに思いを寄せている恵子が加わっていることを知った。どうしようか？　迷った挙句、真木は思い切って登山メンバーの板倉に事情を打ち明け相談した。すると「食糧係は俺がやるから、チャンスを作って必ずモノにして来い」と快く代役を引き受けてくれた。こうして真木の正月山行は出発寸前に突如、スキー行に替わった。恵子にはスキーの合間にチャンスをとらえ、一気に思いを打ち明けるつもりだった。

(二)

板倉を含めた六人パーティーのかもしか山岳会の一行は、大晦日の前日朝、金沢を出て国鉄とローカル電車で山中温泉に入った。街中で追加の品々を調達し、さらに定期バスに乗り継いで山麓へと入り、最後は徒歩で夕刻、登山口のある廃村寸前の真砂集落に到着した。一行は顔見知りの区長のMさん宅に寄って山へ入る挨拶を済ませ、その夜は集落のはずれにある小学校の分教場の一角に持参のテントを設営し一泊した。

翌日は前日と変わり朝から小雨がぱらつくイヤな空模様だった。山に入る前の天気図では大晦日の夜から天気の悪化を示していた。この冬は日本列島全体が暖冬気味で、例年なら一㍍近い雪で埋め尽くされているはずの山々は、所々、まだら模様に雪が残っているだけで、雪を求めて山に入った一行をガッカリさせた。当初の計画では雪の中をかんじきで登り、山頂近くの避難小屋を根城にして雪山を堪能し、年末年始を過ごす、二泊三日の山行を予定していた。しかし、大日山は雪のない夏道でなら通常は日帰りの中堅の山。一行は持参した雪山を想定しての重装登山をやめ、軽装で素早く登頂し、年越しパーティーは下山後、麓のテントの中で行うことにして山に踏み入った。

登山路は、黒くむき出しになって山頂へと延びていた。霧が深く山を閉ざし、時折、小雨から変わった霙が降る中を順調に登った。積雪は標高千五百㍍近い山頂付近に来ても少なく、登山道を浅く埋める程度だった。天候は次第に悪化し山頂に登り着いた時は風雪模様になった。三角点に降り積もった雪を払い記念写真を撮っていると、雪が礫のように顔面を打った。六人は一服する間

も惜しんで下山にかかった。頂上から回れ右をする一瞬、視界が晴れ、正月の準備で走りまわっているであろう多忙な大晦日の下界が、まるで手に取るようにくっきりと、意外な近さで眼下に現れ、すぐに消えた。

避難小屋に到着し、それぞれ持参の簡素な昼食を素早く摂った。誰もの頭の中に下山後のテントでのスキヤキが湯気を上げていた。めいめい防寒用のセーターを着込み雨具を付けて外に出た。風は吹きつのっていたが、さいわい雪は小降りになっていた。遥か灌木の中に続く登山路は白く雪に覆われつつあったが、まだ確認でき下山に支障はないように見えた。大日山を熟知している板倉が先頭に立ち、ヒマラヤ登山の経験を持つベテランリーダーの若山がしんがりを受け持った。夕暮れまでに時間はまだたっぷりあった。

しばらく歩くと広い原の入り口に出た。雪解けの頃にはピンクのカタクリの花が辺り一面に咲き乱れることからカタクリヶ原と呼ばれ、天上の花園と化す広い原だった。

突然、今まで大人しかった風雪が猛然と牙をむき出し襲い掛かって来た。板倉はとっさに小屋へ退却することを考えた。しかし軽装備のリュックの中には寝袋はなく、暖を取る燃料も少ない。非常食はあるがこれで大晦日の夜を過ごすには余りに悲惨過ぎる。それに今晩、大量に雪が積もれば明日の下山が大変だ。麓のテントには美味しいすき焼きと酒が待っている。板倉の頭の中に浮かぶ答えは、どれもこれも引き返すことに対してノーだった。

原の中の道は、ほぼ一直線で五百メートル余。その先は灌木の生い茂る低樹林帯に入り、さらにその下はブナの林の中だ。何とか原を突っ切れば、その先樹々で風も防げる。一瞬、躊躇ったのち後ろを振り返り、全員にかんじきを着用させ、ラストの若山に目で合図して彼の足は一歩、原に踏み込んだ。

途端に猛烈な風雪が真正面から襲ってきた。雪が礫のように目に飛び込み、風は獅子吼のように吠えた。吹き飛ばされまいと地面に這いつくばるようにして、一歩前進しては背を風上に向け、突風をやり過ごした。それはまるで敵前での匍匐前進のようだった。何とか死に物狂いで原を横断し灌木の中に飛び込んだ。一息入れる間もなく、かじかんだ手で時計を見ると午後二時。夏道なら十分たらずのところを何と小一時間近くかかっていた。

後続の面々は難渋しているのか吹雪の中から誰も姿を見せない。荒れ狂う風雪の中を引っ返すわけにもいかず、焦りを感じながら板倉は辛抱強く待った。しばらくすると一人、また一人と黒い影が順に五つ。風雪の中からよろめき現れた。誰も全身が雪だるまだった。

それからの六人は互いの間隔を詰め一塊になり、互いに前後を確認しながら歩いた。樹林帯に入ったが風雪は強まるばかりで容赦をせず、ポンチョの首筋、袖口から入り込んだ。その頃の登山装備の定番であったポンチョは、ナイロンを簡単に縫い合わせただけの代物で防寒効果は薄く、首筋から袖口の隙間から遠慮なく雪が入り込んだ。侵入した雪は体温で溶け下着を濡らし、身体の芯まで凍り付くようだった。体調不良を訴える者も出て来て、一行の歩みは乱れ遅々として進まなかった。

(三)

不意に、思いもかけない「遭難」の二文字が板倉の頭の中に浮かび、ぐるぐる駆け巡った。今の風雪が続けばこのまま全員で下山し続けるのは危ない。若山と相談し、山の地理に詳しくまだ体力に余裕のある板倉が先に麓の真砂集落に降りて救援を頼み、若山リーダーと他の四人は雪洞を掘って風雪をしのぎ、山中で待機

することになった。
　板倉は風雪の中を転がるように駆け下りた。いや、駆けるより雪の上を滑り落ちた。滑り落ちながら彼は真木の顔を思い浮かべた。いつも山行の都度、仲間内でトップを競って共に頂上を目指した馬力の持ち主の彼がそばにいてくれれば、どんなにか心強いことか。それにしても、彼は思いを寄せる彼女に、思いのたけを打ち明けられただろうか？　自分の置かれた絶体絶命の立場を忘れ、ふと、そんなことを思った。
　板倉はいつの間にか自分が大きな沢の真ん中を滑り降りていることに気が付いた。途中、登山道は一度、沢を渡って尾根に取り付き、尾根の上部に出て真っ直ぐ麓へと下っていくのだが、そのまま、本沢を下ってしまったらしかった。今更、尾根を登り返す時間も余力もなく彼は雪崩の危険も顧みず、新雪の埋まる沢の中を喘ぎながら、もがくようにして下って行った。この沢を出口付近まで下ると、尾根を下ってきた登山道に出会うことを彼は知っていた。沢の中は相変わらず風雪が吠え猛り視界はゼロだった。
　無限に続く沢をどれくらい下ったろうか。そろそろ出口も近いはずだ。疲労困憊してよろめき歩く真木がそう思った一瞬、雪が止み強風が低く垂れ込めた霧を吹き飛ばした。急に広がった視界の先にちらっと登山道を示す道標らしいものが見えた。「やったぞ」。喜び勇んで踏み出した次の一歩は虚しく空を切った。彼の体は雪を踏み抜き高さ五メートルほどの岩の上から、もんどり打って落下し、そのショックでそのまま気を失った。
　どれくらい時が経ったのだろうか？　板倉は息苦しさのために我に返った。朦朧とした頭の中を整理し、猛吹雪の中、岩場から落下したところまでを思い出した。あわてて立ち上がろうとした。しかし、全身を何者かに押さえ込まれているようで身動きできなかった。必死にもがいているうちに、重苦しくのしかかっている相手が降り積もった雪であることに気付いた。雪に埋もれかけていた半身を起こし、立ち上がろうとしたが力が入らず、再び仰向けに倒れ込んだ。雪の褥は柔らかく彼を包んだ。寒さは全く感じなかった。むしろ心地よかった。
　再び気が遠くなりかけた板倉の瞼の裏に、なぜか一瞬、無二の親友真木と、彼がまだ会ったこともない真木の彼女の白い顔が並んで、仲睦まじく微笑んでいるのが見えた。その上を風が鳴り、雪が遠慮容赦なく降り積もって行った。

(四)

　救助隊を呼ぶため、板倉を先行させたリーダーの若山は、風雪を避けるため、まだ余力を残しているメンバーと協力して早速、雪洞造りを試みた。ベテランの彼にとって、これまで何度も経験していることだった。しかし軽装のためスコップは手元になく、手にしたストックで雪を掻いた。雪はすでに一メートル近く積もっていたが、降りたての新雪はまだ柔らかく、雪洞を作るには無理な状態だった。手で穴を掘り、壁を作ったが、すぐに崩れた。思い切って避難小屋に引っ返すことも考えたが、疲れ果て冷え切った身体で全員が猛吹雪の中、急坂を登り返すことは不可能だった。時計はすでに三時を回り夕暮れが迫っていた。意を決した若山は先行した板倉の踏跡が見える明るいうちに彼を追うことにした。
　ようやく登山道が尾根を登り返す地点まで下って来て、若山は板倉の踏跡が真っ直ぐ沢を降りているのを確認した。一瞬、躊躇したがそのまま後をたどった。コースから離れているが、この沢を真っ直ぐ下れば登山口に出ることを、板倉と同じく彼も知っていた。
　風雪は収まるどころかますます猛り狂い一行に襲い掛かった。

下りとはいえ新雪の中の歩みは一歩一歩が難渋をくわえた。沢の中はあちこちで雪に隠された落とし穴が潜み、落ちると自力では這い上がれず、みんなで引っ張り上げる必要があった。その内、隊列が乱れ始めた。初めの内、体力のある者は難渋する仲間をカバーしていたが、自力が尽きると、もう他人の事はどうでもよくなった。誰もが疲労と寒さで正常な判断が出来なくなっていた。トップを切ってラッセルしていた若山の疲労も甚だしく、女性メンバーのS子一人をカバーするのが精一杯だった。すでに谷間は夕闇に包まれ始めていた。若山の目には前を歩いているはずの仲間の姿はS子以外見えず、乱れた足跡だけが谷の下部へと続いていた。

更に小半時が経った。いつの間にか風は止み、雪だけが音もなく降っていた。一瞬、S子をカバーしへとへとになった若山のヘッドライトが、見覚えのある黒い岩影をとらえた。若山はそれが登山口からほど近いところにある大きな岩であることに気付いた。「助かった」。彼は沢から這い上がって岩陰のくぼみにS子を座らせ、その横に腰を下ろした。疲労困憊してこれ以上は一歩も歩けそうにない彼女をここに残し、集落まで降りて救援を頼むつもりだった。先行した板倉や風雪の中に消えた他のメンバーのことも気がかりだった。

しかし彼もまたS子に負けないくらい疲労困憊し、頭の中は朦朧としていた。並んで腰を下ろした途端、ふいに睡魔が若山を襲った。それは甘美な夢の世界に彼をいざなった。えも言われぬ甘美なクラリネットのメロディーが囁くように流れてきた。朦朧とした意識の中で、彼はその天上の調べが、大好きなモーツァルトのクラリネット五重奏曲の主題であることに気付いた。遭難者が最後を迎える時、睡魔に襲われることを知っていた彼は、眠るまいと腿をつねって必死に抵抗したが、ついに力が尽き崩れ落ちた。

(五)

板倉や若山たち六人が山に入った日の前日、真木はスキー仲間五名とともに、信州の戸隠スキー場に向かった。密かに思いを寄せる恵子も、メンバーの一人としてその中にいた。四日間のスキー行のチャンスをとらえ、思いを打ち明けるつもりだった。確たる自信は無かったが、うまく行くのではと自惚れていた。終列車で深夜、閑散とした長野駅に到着し、固い木のベンチで寝袋にくるまって仮眠、翌早朝、戸隠高原行きのバスに乗った。バスは年末年始の休暇を利用したスキー客で満員だった。

雪のない真っ黒の市街地から、バスはつづら折りの坂道を登って標高を稼ぎ、やがて標高千メートルを超える白一色の戸隠高原に出た。戸隠スキー場は天の岩戸伝説で有名な信仰の山、戸隠山の中腹にあった。真木たちは、夏は観光客、冬はスキー客で賑わっている麓の中社に着き、宿坊の一つに入った。その日は午前中、与えられた大部屋の炬燵に潜り込み寝不足をカバーし、昼食に出た地元名物の戸隠蕎麦をかき込んで、午後、近くのゲレンデに向かった。テレビで報じていたように全国的に雪の少ない年末で、ゲレンデのあちこちに霜枯れの茶色いブッシュが顔をのぞかせていた。曇天の中、小一時間も滑ると天候が急変し、目を開けておれないくらいの猛烈な吹雪となり、夜行の疲れも出て、我先にと宿舎へ逃げ帰った。

翌日は大晦日。天気は上々。リフトのてっぺんに登ると、戸隠連山が青空の下、鋸の歯の様な純白の峰々を連ねていた。今日こそ思いを告げる絶好のチャンスだ。恵子の姿を目の端に捉えながら真木は固く決心をした。話をどこでしようか？　思いをめぐらした結果、彼は、滑降の途中、恵子が一息入れているとき、後ろから追いついて告げることにした。

頂上に向かうリフト乗り場には十数人が列を作って並んでいた。彼はそっと恵子の後ろについた。「キャー」その時、突然、恵子が悲鳴を上げた。見ると上部からスキーで滑って来た青年がコントロールを失い、リフト待ちの真木たちの列に突っ込んできた。スキーの先を引っかけられたはずみで彼女は倒れ、青年はその下部にいた真木に衝突、二人は絡み合いながら転倒した。よろよろと立ち上がった真木の左手に激痛が走った。鮮血が白い雪面にこぼれ落ちた。相手のスキーエッジがはずみで真木の手の甲を、手袋ごと切り裂いたようだった。

事故の連絡がリフト乗り場から救護所へ伝えられ、パトロールがスノーボードを引いてやってきた。その場で出血箇所の応急処置がとられ、真木はボートに押し込められた。救護所に医師の姿は見えず、居合わせた担当者に上腕をゴムバンドで巻いて止血され、傷口を包帯でぐるぐる巻きにされて、急遽呼んだタクシーに乗せられた。

タクシーは山を下りて長野市街に入り、運転手は外科病院を探した。あいにく大晦日の事とて病院はどこも開いておらず四軒目で、やっと小さな外科医院を探し当てた。医師の診察の結果、左手の甲がV字形に切り裂かれ、親指を除く四本の指の腱を、すべて切断する大ケガだった。手術の準備があわただしくなされた。切断された四本の腱を一本ずつ糸でつなぎ、最後に腱を包むようにして甲の皮膚を縫い合わせた。たそがれ時に始まった手術は四時間近くに及び、終了したときは午後八時を軽く回っていた。

ギプスで固められ、包帯でぐるぐる巻きにされた左手を、三角巾で肩から吊るし、真木は茫然として天を仰いだ、ぶつかってきた相手を恨む気持ちは毛頭起きなかった。これは天罰であると思った。信頼の厚い山仲間の友情を裏切り、自分の事情だけを最優先して、軽薄にも出発直前にふらふらとスキー行に変更したことが、山の神の怒りに触れたのだ。彼は冷え冷えとしたベッドに横臥した。暖房が効いているはずなのに薄暗い病室は寒かった。窓の外は漆黒の闇で、風が鳴り、雪が降りそそいでいた。

山に入った仲間たちは今頃、どうしているだろうか。確か、大晦日の今宵は山頂の小屋で新年を迎えるため、スキヤキパーティーを繰り広げているはずだ。鍋ではぐつぐつと牛肉やネギ、キノコたちが音を立て、湯気と香りが辺りに漂っているだろう。その鍋を取り囲んで日本酒やビールがあちこちに置かれ「乾杯！」の声が飛び交っているはずだ。歌は「雪山讃歌」から始まり、青春讃歌の数々を歌い終わった後、最後は舟木一夫の「高校三年生」の曲にみんなで他愛ない歌詞をつけた「かもしか仲間」で締めくくっていることだろう。

♪赤い夕陽が雪山初めて
峰の彼方に沈むとき
あ……かもしか仲間たち
ぼくら離れ離れになろうとも
テント仲間はいつまでも

「かもしか仲間」とは真木たちのグループ「かもしか山岳会」の名を読み込んだものだった。いつもテントでの宴会の最後に、山よ割れよ！　とばかり皆で大声を出して歌い、その後、好き勝手に寝袋に潜り込み、大地に抱かれるようにして夢路をたどったものだった。

もう一歩のところで、突然降ってわいたアクシデントにより恵子に思いを告げるチャンスを逃したが、もう、それはどうでもよかった。それより板倉をはじめ山仲間たちに対する申し訳なさと、自分の置かれた境遇に対する情けなさで、真木は心が塞いだ。麻酔が切れ痛みに耐えていると、いつの間にかウトウトと眠りに落ちた。

真木は痛みにうなされながら山仲間たちの夢を見た。モノトーンのその画像は、なぜか彼が想像した山小屋で宴会を楽しんでいるシーンではなく、風雪の中をあてどもなく彷徨っている姿だった。板倉がトップに立って風雪の中をラッセルしていた。あとの仲間たちはその後をよろけながら、黙々と幽鬼の集団のように一列になって歩いていた。どうしたのだ！　思わず大声をあげそうになり、夢から覚めた。

手術の翌日は元日だった。真木は日中を悶々と病室で過ごし、移動のための処置を受けてから、夕方、世話になった医院を辞し長野駅から夜行列車に乗った。予定を変更してスキー場から駆け付けた仲間たちが、付き添ってくれた。その中に心配そうな恵子の顔もあったが、今となっては何も語ることはなかった。

翌朝、真木は悄然と小松駅に降り立った。まるで敗残兵の心地だった。知人に会うのが恥ずかしく下を向いて歩いている彼を、会社の同僚が気付き近づいてきた。一瞬、逃げようかと思ったが叶わなかった。「新聞見たよ」。同僚が突然話しかけてきた。彼は一瞬、まさかと思った。てっきり自分の大怪我のニュースのことかと勘違いした。しかし、同僚は真木の肩から吊るした腕には目もくれず、「？」と問い返す彼に「大日山で大量遭難があったらしい」と言った。駅近くの独身寮にあわてて戻り、もどかしく地元の新聞を開いた彼の目に「大日山登山の6人、吹雪にまかれて戻らず。全員、遭難か！」。衝撃的な活字が一面をブチ抜いて躍っていた。紙面のど真ん中には、彼も写った昨年暮の納山会での全員集合の写真が、でかでかと掲載されていた。何という運命のいたずら。

大晦日の午後から降り出した雪は無情にも一週間の間、やむことなく降り積り、山や谷を深く埋めつくし、平野部も大雪になった。麓の真砂集落の住民、地元の大聖寺署や近辺の山岳会、メンバーの家族が雪の降り続く中、登山口周辺を捜索したが、降り積もる雪に手も足も出ず、雪崩による二重遭難の恐れも出て来て、早々と打ち切られた。

真木は左手の大怪我のため捜索に加われず、正月休暇中、捜索本部に詰め電話番を引き受けた。電話が鳴り響くたび「発見！」の朗報を期待したがそのような連絡は皆無だった。航空自衛隊小松基地のヘリコプターも飛び周辺を周回したが、雪一色の真っ白な山中に、手掛かりとするものは何も発見されなかった。

(六)

事件から三ヶ月近くが経ち、ようやく雪解けの進み出した春の彼岸過ぎ、管轄の大聖寺署と地元の山岳会の手で第二次の捜索が再開された。真木たち残った数名のメンバーは遭難者の家族とともに、各地の山岳会や登山グループを訪問し、頭を下げて捜索のお願いに走り回った。真木は会社に事情を話し、残った有給休暇をフル活用して、週末から山に入り浸った。それは生存者を捜す希望の捜索ではなく遺体を捜す失意の捜索だった。

恵子への告白は事件以来、三ヶ月間、それっきりになっていた。その後、本人と会ってもいなかった。忘れた訳でも諦めた訳でもなく常に心に引っかかっていたが、真木としては目前で勃発した大事件にかかりっきりで、それどころではなかった。

そんな或る日、恵子の方から会いたいと連絡があった。電話では控えめな声だったが、事件への対応でこころの晴れない日が続いていた彼の胸に、一点の灯がともる心地だった。約束の日の喫茶店での初デート？で、彼女は彼に紙袋を差し出した。開けてみるとなぜか片方だけの手袋が入っていた。毛糸で編んだ手袋の五本指の先端はなく、手の甲の部分だけがすっぽり覆われるように

なっていた。それは手の甲に負った傷を温かくカバーしながら、捜索の際、指が使いやすいよう気遣って一目ごとに編んだ、彼女の彼に対する気持ちを示すものだった。真木は彼女への告白の手間が省けたことを知った。

遭難者の遺体は一人、またひとりと捜索隊によって残雪の中から発見された。若山リーダーの遺体は登山口から五百㍍ほどの黒い岩陰にS子と二人、仲良く腰を下ろした状態で発見された。生還まであと一息の地点だった。しかし、ただ一人、真木に「山は引き受けるからスキーに行って思いを遂げて来い」と言って、快く代役を引き受けてくれた親友、板倉の遺体だけは、いつまでたっても発見されなかった。

雪解けが進み、樹々か新芽を付け青々とした枝葉に変わると、視界が遮られ遺体の捜索は困難になる。白山山系では過去、行方不明になったまま遺体の発見されない遭難者が、何人もいた。五人の遺体が発見され、五月に入ると捜索隊は次々と解散し、残る板倉の遺体は真木と板倉の家族だけで探すことになった。

あてどもなく山中を遺体の影を求めて歩き、その日も徒労に終わりそうだった。真木は家族たちを日のあるうちに先に下山させ、たそがれ近い本沢を一人で下っていた。と遥か下方、雪解けでようやく姿を現した小さな滝の下に黄色いものが目に付いた。そこは捜索時の通路として何度も歩いたところだったが、雪が詰まっていて、気が付かなかった箇所だった。急いで下ってみると、それは板倉の着ていたヤッケの一部だった。雪の上で眠るように仰向けになった遺体をそっと抱き起すと、生前の面影がほのかに残っていた。そして両足には生を求めて雪の上を共に彷徨したであろう愛用のかんじきが、しっかりと括りつけられていた。「残念だったろう」。親友の変わり果てた姿を目の当たりにして、真木はそっと呟いた。

気が付くと辺りに黄昏が忍び寄っていた。もう遺体の収容は今からでは無理だった。「遅くなってごめんな。長い間、寒かったろう」。着ていた防寒具を遺体に掛け、その上を雨具で覆って、現場を後にした。明日の収容の際の目印に赤いテープで要所要所にしるしをつけながら、彼は連日の捜索ですっかり勝手を知った山中を掛けるように降りた。

翌早朝、家族を伴って発見現場に戻り、遺体をスノーボードに乗せ山を下りた。雪のない箇所は彼が背に担いだ。板倉の身体は水分をたっぷりと吸い、ずっしりと重く、何度も足を滑らせ転びかけたが、周辺から支えられ汗にまみれて麓まで降ろした。

遭難者六名全員の遺体が発見、収容された一週間後、金沢市内の葬儀場で家族をはじめ関係者一同が参列して合同葬儀が行われた。式では残った会のメンバーを代表して真木が弔辞を読んだ。途中で涙が溢れ声を何度も詰まらせた。リーダーをはじめ主要メンバーの大半を失った「かもしか山岳会」は、その後、名を残すことなく解散した。

エピローグ

こうして愛知大生の北アルプス薬師岳遭難事件と並び、昭和中期の山岳界をゆるがした白山山系大日山遭難事件は、幕を下ろした。薬師岳同様、生存者は誰もおらず遭難の真相は分からなかったが、真木は数少ない状況証拠を参考に適宜考察を加えながら、反省を織り込んで報告書を作成し、警察や山岳関係者に提出した。遭難前の納山会で、会の結成十周年の記念行事として石川県内の過去の遭難史を、真木を中心にしてまとめ発行することが決定されたが、まさか、そのわずか半年足らずの間に、自らの山岳会の遭難状況をまとめ発行することになろうとは……。真木は運

命の皮肉に絶句した。
　この年の秋、真木は恵子にプロポーズし結婚した。結婚を機に、それまでの危険な冬山登山や岩登りなど先鋭的な山行をやめ、トレッキング中心の穏やかな山行に切り替えて、家族ぐるみで楽しんだ。共に後期高齢者に達した今も、密かに地方の隠れた名山を探し、地図を広げながらあれこれ、卓上で思いを巡らしている。
　あれから半世紀。今は世間からすっかり忘れ去られたこの大事件を、車庫の壁で所在なげにぶら下がっている色褪せくすんだ一対のかんじきと、左手の甲に今もくっきりと残された長さ十センチばかりの鉤型の傷跡が、生涯、忘れ去ることのない青春時代の悲しくも切ない思い出として、晩年を迎えた真木に語りかけてくる。